

場の記述に主眼があるが、その中でもわれわれ心理臨床家がクライアントとともに目指すべき「現実」の質が明確化されたのではないかと思う。

この線に沿うものとして、田畑治をはじめとする共同研究者と数年来、「臨床青年心理研究会」の集まりを持っているが、今年の本巻に「臨床青年心理学研究（Ⅳ）—女子症例に関する諸報告—」と題して、「序悦」（本紀要第24巻）の理論的方向づけに対応する具体的実践例による若干の考察をまとめることができた。

また、女性の同一性拡散の問題は、男性のそれに比べると「人生周期」の各段階にわたってより散在的に存していると思われるが、こうした観点をも含め、かなり劇的な生活史と治療経過をたどったある女性症例については、今年の東海心理学会第28回大会において発表された（「ある不安神経症者の治癒転機」）。この詳細も本巻に掲載される予定であったが、不意に間にあわなかったのが残念である。

科学研究費の助成を受けたのは、村上英治、土川隆史（文学部、学生相談室）との共同研究になる「名大式ロールシャッハ技法における“思考—言語カテゴリー”の再構成」のプロジェクトである。これも私の10年来の関心の的であるが、今後いよいよ本格的に取り組みねばならなくなってきた。

もうひとつの関心事である予防精神衛生の視点からの幼児自閉症や精神分裂病の成因論を含めた家族関係論についても、秋頃までには何とかまとめあげたいと考えている。

この8月はじめには、河口湖畔で行われた学生相談研究会議の主催になる学生相談関係教官エンカウンター・グループに出席することができた。これは私にとって興味深い新鮮な体験であったが、この意味が内的に熟し深化していくためには、まだいくばくかの時間が必要であろう。

研 究 経 過 報 告

村 上 隆

53年8月から54年7月までの経過を述べる。

(1) 3相データ解析

今年度は共同研究としては進展せず、3相因子分析の1変種に関する考察を単独で本紀要に執筆したにとどまった。このモデルは、昨年度この欄で述べた“職業レイネステスト”の分析の途上で生れてきた。決して机上のモデルではないつもりである。これによる分析の結果昨年度述べた結論は変更を予儀なくされ、発表は慎重を期することにした。いずれにしても、この過程でデータに含まれる情報をいかにして取り出すか、という問題について多くの貴重な体験をした。今後、このモデルについても幾つかの問題点が出現してくるであろう。いわゆる3相データを抱えておられる方には、是非一度ご利用いただき、感想をお聞かせいただければ幸いである。

(2) 心理物理的尺度構成

これも引き続き、difference scaling の検討を行なった。今年度は大型計算センターの端末が当教室でも利用可能となったので、これを利用した on-line 形式の実験を行なった。これについては、日本心理学会第43回大会

において発表されるであろう。こういった手法は、手法自体に意味があるのではなく、それを通して人間の判断メカニズム、または心理量の特性とといったものにアプローチすることに意味があるわけである。ここ3年間ほどは、手法の開発にのみ関心が向きすぎていたきらいがあったので、今年度は、判断メカニズム、特に比判断と差判断の矛盾について検討する実験を行ないたいと考えている。

(3) 長期記憶検索モデル

漢字を材料にした長期記憶検索の時間的過程を説明するモデルを構成する試みを行なった。これは研究生鳥居祥子との共同研究であった。最近流行の cognitive psychology をちょっとのぞいてみた、という感じであるが現在のところ、今までの指数モデルのような単純なことではない、ということが明らかになったという程度である。一部は今年度の東海心理学会において発表した。今後は、コンピュータプログラムとしての理論構成の方向を目指すべきであろうが、現在のところ手を付けていない。